

## わたしと路面電車

昔から路面電車が大好きだった。普通の自動車といっしょに、道路をどこどこと走っている姿がお気に入りだったのだ。

岡山市にも路面電車が走っている。わたしが生まれたのは岡山市から北東に五十キロ以上離れた小さな温泉町なものだから、なかなか、路面電車に乗る機会はなかった(今ののように、各戸に一台、いや、各個に一台、車があるという時代ではなく、道路事情もすこぶる悪かったのだ)。そのぶん、岡山に出て、路面電車に乗れたときの嬉しさといったら、文字通り、胸が膨らむ思いがしたものだ。

岡山市にはデパートも動物園もあったから、デパートの最上階のレストラんで見知らぬ異国の旗が飾られているお子様

ランチやカフェを食べるのも、屋上の子どもランドで観覧車に乗るのも、動物園で象に餌をやるのも、それはもう楽しい楽しい出来事ではあったのだ。

だけど、小さなわたしの心を膨らませ、弾ませ、せつないほどときどきさせたのは、路面電車だった。チンという鉦の音とともに、箱形の電車が動き出す。わたしは靴を脱ぎ、座席に膝をつき、窓に額をくっつけるようにして、ゆっくりと過ぎていく街の風景に見入っていた。幼いときの至福の思いは、路面電車とともにある。それくらい、好きだった。

だけど、わたしは大人になった。車の免許も車も手に入れた。岡山までの道路も格段によくなった。幼いころと同じ街に住んではいるけれど、仕事で岡山市

に出かけることもしよつちゆうある。なのに、路面電車に乗ることはほとんどなくなった。乗りたいとも思わなかった。あれほどときめいていたはずの胸が、いまだに道路を走る電車を見ても、びくつとも反応しなくなったのだ。

これが大人になるといふことなのだろうか。

そんなことを思ったとき、ふつと「乗ってみようか」とわたしがわたしに囁いた。ちようど、仕事の合間で一時間ほど時間が空いたので。わたしは、路面電車に乗り込んだ。

「どちらまで行きなさん」

乗ってすぐ品のよいお婆さんが声をかけてくれた。「あ……一応、城下までです」と答えた。お婆さんにはにこにこ笑いな

ら、わたしに蜜柑を一つくれた。わたしの横にいた四歳ぐらいの女の子にも手渡した。女の子は行儀よく「ありがとう」と礼を言った。蜜柑を手にもって、窓の外をじつと見ている。何十年前のわたしのように。ああ、これだったんだと気がついた。路面電車の中を流れる、この優しい時間。幼いわたしはこの時間に惹かれていたんだと。どたばた走り回る日々の中で忘れていた時間がここにはまだ、あった。何ですてきなことだろう。蜜柑をバッグに入れ、わたしは降車した。お婆さんと女の子がさようならと手をふってくれた。

また乗ろう。ゆっくり遠ざかっていく電車を見ながら、久しぶりに胸が膨らんだ。



イラスト・岡林玲生

文・あさのあつこ  
Atsuko ASANO

岡山県美作市生まれ。「バッテリー」で野間児童文芸賞、「バッテリー2」で日本児童文学者協会賞、「バッテリー1〜6」で小学館児童出版文化賞を受賞。同シリーズは累計で900万部を突破する人気を誇る。また2007年には滝田洋二郎監督により映画化。2008年にはNHKでテレビドラマ化された。歴史小説やミステリーにも活躍の幅を広げ、他の作品に『弥勒の月』『No. 6』『地に埋もれて』『The MANZAI』など多数。郷里の岡山で作家活動を続けている。